

# エンゼル ANGEL VENUS ヴィーナス

失墜の天使

小説 新居佑 挿絵 高瀬むう

立ち読み版



第一章	登場、夢と希望のヒロイン	006
第二章	生徒会長、屈辱の拘束調教	034
第三章	淫欲に溺れるマリリン	066
第四章	淫靡な罨、スイート対戦闘員	097
第五章	牝犬、真夜中のロストヴァージン	128
第六章	学園恥辱ショーでの再会	168
第七章	スイート、禁断の快楽に墜つ	202
第八章	妊婦奴隷の女神たち	247

## 登場人物紹介

Characters



かみぞの ゆう な  
**神園 優奈**

聖ウェネス学園に通う少女。運動神経が抜群で、部活の最強助っ人要員として学園内で有名。やや直情的だが、仲間想いで優しい性格。エンゼルスイートに変身する。



なる み あいり  
**成美 愛理**

優奈の親友である、聖ウェネス学園の生徒会長。普段はおっとりした清楚なお嬢様タイプだが、悪を前にしてもひるまない高貴な勇気を持ち主。エンゼルマリンに変身する。

**ダイアナ**

地球を襲う侵略者である“ラーマ”の女幹部。実力はあるが、エンゼルヴィーナスに対しては連敗を喫している。

A Vのモザイクなど比べ物にならない薄さ、ほとんど半透明とっていいくらいにまで透き通った変身スーツの仕様に、恥ずかしさで理性が沸騰しそうだった。

本当なら目を背けたくなるような恥辱だったが、こんなにまで発情している女の子の花弁を見るのは初めてだ。

媚薬によって増強された情欲の好奇心のせいで、恥部をまじまじと見つめてしまう。

まるで極上のアワビのような肉厚の陰唇は、普段の薄い肌色から、今はおかしいくらい真っ赤に充血している。

なにもないときはぴっちり閉じ合わせている二枚貝は、パツクリと左右に開ききり、蜜で媚肉が滲むくらいジュークジュークに濡れそぼっている。

「へえ、エンゼルマリンの処女膜って、こんな形なのねえ。清楚な顔にしても、ココは本当いやらしいわ」

「つつ！ ふううつ」

ギツクリと拘束されているのをいいことに、ダイアナは邪魔なスーツを横にずらし、完全に隠すものなくなった肉唇をまじまじと凝視した。

暖まった空気と、ダイアナのわずかな吐息が陰唇に触れると、アソコを見られているという感覚が一気に現実感を帯びてきて、たまらない恥辱感が湧く。

吊り下げられた高さは、ダイアナの視線の少し下だ。恥ずかしさと悔しさから脚を閉じようとしても、ブルブル情けなく脚の媚肉が震えるばかりで、余計に恥辱感が増していく。

明らかに発情している恥部から目を逸らすこともできずに、もう自分の股間へと視線を注ぐことしかできなくなる。

「ほら、ココ。これが処女膜よ、わかるでしょう？」

ダイアナの指が愛理のぷっくりと膨れた陰唇、そこに開いた膣口へと伸ばされる。

「くっ、あつあつ……触るな……っ。あなたなんか……触ってほしく、ないわっっ！」  
ベツトリと愛蜜で染みだした愛理の花弁の穴の奥に、縦長の薄いヒダが見える。すぼめた唇みたいに平たい粘膜であるヴァージンを、敵の女幹部なんかには弄ばれるなんて。

「ひいうっ！ あうっ……くっ、んんんっっ」

ダイアナの指が愛理の心を弄ぶように、プニリプニリと充血した淫肉の花に触れると、自分でもびっくりするくらい甘い声が漏れる。

処女である愛理の牝肉の初心な反応を楽しんでいるかのように続けられる悪戯いたずらなソフトタッチは、愛理の意思に反して、変身ヒロインの肉体を思うままに弄んでくる。

（ああつ、どうして!? 私、感じちゃってるっ!? く、悔しいのにいっっ）

じっくりといたぶられているというのに、処女膜の間に開いた指一本分ほどの横幅の穴からは、先ほどよりも粘度も色味も濃くなった愛蜜が、ドプリドプリと溢れ出る。

股間の麓から溢れたトロリとした熱々の本気汁が、引き締まったウエストやお臍にジワリジワリと垂れた。

窮地から脱しようとギチギチと必死で身体を動かすが、ワイヤー拘束でムッチリ感の増

した肢体ではどう動いても、自ら責めを欲するような扇情的な動きに映ってしまうだけだ。きれいに手入れされた薄い淫毛がジユクジユクに湿って、ダイアナにフウツと息をかけられただけで、背筋にゾクゾクした、頭を変にさせる電撃が流れる。

敵に視姦されることで、さらにいやらしくヒクつく膣穴からは、香りたつ牝の発情臭が漏れ出てくる。

「あら、強情なマリンとは違って、あなたの牝穴は歓迎してくれるのかしら？ それじゃ、そろそろ……ふふ、気持ちよくしてアゲル♪」

魔女の指先が陰唇から離れ、すでに準備が整って完熟している膣穴へと向かってくる。

「気持ちよくなんてつつ……そんなのいらないわっ！ 離れなさいっつ！」

ピチピチに張り詰めた美肉をブルブルさせながら、内側で燃え盛る情欲のマグマを、強い意志で必死に抑え込む。

「気持ちよくなりたくない女なんていないわよ。それはエンゼルヴィーナスであるあなたも同じ。どんなに強がって正義面しても、ほおら……」

ズブリツツ、ズチユズチユウツツ。

意識的に処女膜を破らないようにして、ダイアナが自らの中指を愛理の蜜壺にジユクンツと押し込ませてきた。

柔らかい肉ヒダが、まるで魔女の指を誘うようにうねりながら、肉と指の擦れる感触を媚薬で狂ったように増幅させ、信じがたいくらいの快感に変換して、愛理の初心な女体を

貫いてくる。

「ひいぐうっ！ くっ、ううっ……ふうううっ！」

背筋を走った官能の稲妻に拘束された身体がピンツ！ と弾けそうになるが、全身に力を込めて、牝の衝動を無理やり我慢する。

（これ気持ちイイッ……ああっ、けど負けない。感じて……たまるものですか……っ！）

セックス、それに準ずる行為で強い快感が起こることは、知識では知っていた。だが愛理の身体を迸る快感の嵐に、自分の想像力のなさを全神経で思い知らされる。

グチュツ、ギチチイッ！

「うわ、すごい締め付けっ。ふふ、すごい食欲よ、あなたのマンコ。敵の指だっというのに、ぐいぐい締め付けて放さないの」

「あっ……ひぐ……ううっっ！」

愛理は必死で唇を噛み、眉をひそめ、瞼をきつく閉じて、下腹部から連続して放たれる牝の快感、という責め苦を耐え忍んでいた。

ヌチュツ、ドチュ……ジュブジュブツ。

見なくてもわかる。自身の肉ヒダの一筋一筋が、教えなくてもいいのに、脳裏に向かって、細胞に向かって、指で膣内を弄ばれているイメージを鮮明に叩きつけてくる。

（よ、悦んでるうっ……グチャグチャなの教え込まれてるっ。耐えなきゃ。こんな気持ちイイのに流されたら……もう、エンゼルヴィーナスに戻れない……っっ！）

魔女の細くて長い指が、愛理の、初めての膣道をゆっくり、廻るように進んでいく。女性らしく手入れされた長い爪が、ウネウネと蠢く肉ヒダに引つかかっては、弄ぶように初心な膣壁を弾く。あらゆる感覚が初体験なのに、こんな恥辱的な責めを覚えさせられるなんて、悔しくてたまらない。

一ミリ指が進むたびに、また新たな感覚……牝の気持ちよさを学ばされる。いつそのこと一思いに奥まで貫いてくれたら、どれだけラクになれるだろう。

しかしサディスティックな魔女は、そんな愛理の初々しい気持ちなどお見通しと言わんばかりに、ゆっくりねちねちとしか指を進ませてこない。

「ココ、今ビクンッてなったわね、指の腹より爪が気持ちイイの？ マゾなのねえ。ほおら、蜜がたつぷり溢れてきたわ。あなたもうトロトロねえ」

オナニー経験すらない愛理にとつて、自分の知らない性感帯を発見され、逐一報告されたあげく、さらに気持ちよくなるように開発されることは、屈辱以外のなにもでもない。

いつの間にか、ダイアナは掌を縦にして、人差し指から薬指までを広がった陰唇の中にズブズブと挿入させていた。

愛理の処女膜が縦長の唇状に広がっているためだと告げられたときは、恥ずかしさを感じたはずなのに、ドプツとより多くのラブジュースを放ってしまい、ダイアナの失笑を買うハメになった。

「や、やめ、なさいっ！ いい加減んっ、ああっつ！ 放れろ……おおっ！」



「はぁあんっ、あぁっ……くっ、ううっ……ひいんっつ！」

吐息が激しくなり、腰が魔女の指に連動して、ビクンビクンッ！ とはしたなく動く。

「エンゼルマリンもやっぱり女ねえ。普段あんなに強くても、コッチを責められると、まるで子猫ちゃん……それじゃあ、そろそろクリちゃんの方もいじめちゃおうかしら？」

ダイアナのあいた左手が、陰唇の頂点で赤く充血した、かわいらしい小豆へと伸びる。

ドブドブと溢れてくる愛理のラブジュースをローション代わりに指にベットリとつける  
と、人差し指と中指でクリトリスから肉唇にかけて円を描くようにサワサワと触り始めた。

「ひあんっつ！ あ……くっ、はぁはぁ……ううっ」

（な、なんなのこれ!? 軽く撫でられただけなのに、すごい……感じるっつ！ しかもアソコの愛液まで使われて……うくっつ）

膣よりもはるかに過敏なクリトリスの感度に、愛理は驚愕する。魔女とは思えない静かな愛撫だが、それだけなのに、たまらなく背筋がゾクゾクする。

ネットリとした自分の女蜜が指先ほどの小さい淫核に塗り付けられ、指で何度も何度もあえて優しく、いたわるように撫でられるという恥辱を受けているのに、身体は素直だ。

「すごい敏感なクリちゃんねえ。しかも貪欲」

「くっ、違うっつ……これは……違う……わよおっ」

ダイアナの言葉を否定したくて、指先から逃げるように腰を左右に振ってみても、汗をびっしょりかいて発情した女体は、まるでストリップ嬢の卑猥な腰ダンスにしか見えない。

「はあはあ……くっ、うう。ふう、ふう……」

「うふっ、これくらいで我慢ギリギリなのね。正義の戦士らしいエッチな身体なこと。じやあ、これは耐えられるかしら？」

クリトリスを愛撫していたダイアナの二本の指先が、ピッと淫核の包皮を掴む。そのまま文字通り豆の皮を剥くように、指を上側へ引つ張ると、ペロツといとも簡単に愛理の肉豆が真つ赤な剥き身になる。

「なっ……あひっ、くううっ！」

皮を剥かれたクリトリスの感度は、愛理の想像をはるかに超えるものだった。保健室のわずかな空気の流れて快樂神経がピンピンと跳ねる。

一皮剥けただけなのに、クリトリスの気持ちよさから、意識を逸らすことができない。

「真つ赤に充血してる……あなたが感じまくってる証拠よ。ほら、ふう……と」

「ひゃんっ！ くっ……や、やめなさい。こんな屈辱……私は、負けな……くうっ」

たった一息吹きかけられただけで、簡単にかわいい声が出てしまう。こっちは必死で我慢しているのに、向こうは淫らな遊びとしか思っていない。

皮をかぶった状態で、軽く触れられるだけでも、背筋に明らかな快感の電気が迸ったのだ。裸のクリトリスを、思いきり指で触られたりしたら……。

だがたとえそんな責めを受けたとしても、耐えてみせる。耐えなければならぬ。エンゼルヴィーナスが、こんな魔女の、こんな卑劣な責めに屈するわけにはいかない。

「身体を強張らせて……健気ねえ。そんなことされたら、もつといじめたくなるわねえ」  
「え……なっ……!! う、うそっつ!!」

ペロリ……。ペロペロ、レロ……。つ。

鉛玉でも舐めるように、ダイアナの舌が、愛理の赤く充血した淫核を舐め始めた。  
(く、屈辱だわ……指じゃなくて……舌、なんかで。なのに……なん、でえっつ!!)

ただ舐められる。人を馬鹿にしきった行為だというのに、今までで一番快感が強い。

ダイアナの舌のざらつきが、充血したクリトリスにれろんつと触れると、膣内が疼き、熱い蜜がねつとりと染み出す。

淫核の頂点をチロチロと連続で刺激されると、甘い痺れに愛理の美貌が苦悶の表情を描き、可憐な唇がフルフルと官能に震える。

「あつ、はあつ……くつ、あああつ……ひいつぐううつ!」

拘束されているか否かは関係なく、どうすることもできない。たかが舌一本で、こうまで好きに弄ばれ、蹂躪されて果てしない恥辱感に満たされる。

もう隠しようのないくらい、ぷつくりと膨らんだ淫核を、キスみたいに軽く唇を触れられ、前後左右上下とリズムカルに、ときに円を描くように、舌尖で愛撫され続ける。

「れろんつ……うふつ、あゝんんつっ♪」

「ひぐうっつ! おつ、あああつ……くあああんつ!」

愛理の脊髄を快感の雷撃が貫いて、黒髪の脳天を駆け上る。

クリトリスがダイアナの唇の奥まで完全に包まれて、魔女の口内でまさに飴玉のようにコロコロチュウチュウと弄ばれる。

（う、う……そよおっ！ 舌だけじゃなく、口の中に入ってるっ!? 私のクリトリスが……ダイアナのおもちゃにされてる。くっ、ああああっ）

ワイヤーで拘束された瑞々しい身体が、快感電流に打たれて、ビクンツツ！ と突っ張る。ムチリとした肉つきのよい太腿がプルプルと切なげに震え、豊かな美乳がプルプルと震える。尖りきった二つの乳首が青い変身スーツを押し上げる。

感じている。誤魔化すことなどできない。クリトリスを頬張られ苛められるのが、気持ちいい！ と、脳髓の奥にまではつきりと認識させられている。

（クリトリスが、こんなに気持ちいいものだっつた、なんてえっ。でもダメよマリリン。気持ちいいのは仕方ないの……屈するのだけは。快楽に溺れるのだけは……絶対にダメっ！）

抵抗できない拘束状態で、膣はおろか、クリトリスを相手の口で嬲られる。力と力のぶつかり合いで敗れるならまだしも、ただ口と舌と指だけしか使われていない、こんな屈辱的で破廉恥な行為に負けそうになっている。

高いプライドが、股間から発する強烈な甘美感によってドロドロに蕩けていく。

「じゅるっ、ずずっ……ちゅちゅうっ！」

膣からの蜜液と魔女の唾液でドロドロにコーティングされたクリトリスを、舌の上で甘く転がされ、あげくにちゅうっつ！ とすぼんだ唇で思いきり吸引される。

さらには膣に入れられたままの右手までが、ジユボジユボと前後上下に動き出し、肉ヒダと淫核を同時に責めぬいてくる。

「あつ、はあつ！ ううつ、ふつ……んんんんっつ！」

腰が勝手に跳ね上がり、膣穴がヒクヒクと物欲しげに蠢いてしまう。

ビリビリと迸る快感の刺激に耐えきれず、漏れ出てしまった艶っぽい声を、唇を噛み必死の想いで堪える。

（い、いつまで続けるの？ は、早く終わって……っ。じゃないと、ああ……なにか変な気持ちになるわっ。快感に身体が……心まで持つていかれそうで……ええっ！）

理性が徐々に痺れてきて、股間で起こる官能の爆発に意識が向きっぱなしになる。

滞留する溶岩のように、女の部分に熱いものが溜まっていく。スーツの内側の柔肌に蒸せるような汗が染み出してきて、香りたつ牝のフェロモンが全身を覆っていくのを感じる。

「はっ、ああつ……はっ、はあ……んんんっつ、ああ……っ！」

眉をきつく引き絞り、我慢に我慢を重ねないと、下腹部で目覚め始めた、なにかに呑み込まれてしまいそうだった。

いつの間にか膣口からは、異様にネットリとした粘り気を持ち、湯気さえ立ちのぼらせている愛蜜がドブドブと噴出される。

（ダ、ダメ……呑まれるっ。熱いなかが……私の中で爆発しちゃうっつ！）

エンゼルヴィーナスの誇りをかけて抗おうとしても、抗いきれないまばゆい官能の光が、

ジユブジユブチュウチュウと苛めぬかれている淫核と膣道で炸裂しそうになる。

怖い。いったいなにが自分の身体で起こるといふのだろうか。エンゼルマリンの矜持すら吹き飛ばされそうな最悪の予感が、身体をどんどん熱く痺れさせる。

「はあはあっつ、あああっつ……ふうふうっつ、ふうあっつ!!」

グンツツ! と愛理の首が仰け反るように跳ね上がり、膣穴から脳天にまで甘い雷が逆った瞬間……。

ズブリ……イイ。ジユポンツツ!

「あっつ!? あああ……はあはあ……あ、うううっ!」

いきなりダイアナの指が膣道から引き抜かれてしまった。クリトリスへの愛撫も終わりを告げ、ベットリとした唾液で濡れた剥き出しの淫核が、ビクンツツとひきつっている。

「あらあら、どうしたの? せっかく責めるのやめてあげたのに。なあに、その物足りなさそうな顔は?」

「はあ、はあっ……だ、誰がそんな顔……あ、あうっ、してないわっ! はあ、くううっ!」

強気な言葉とは裏腹に、昂った胸の鼓動が収まらない。高まりきった熱が逃げ場を失って、愛理の身体……特に膣道の奥にある子宮をキュイキュイときつく痺れさせる。

不完全燃焼で終わった牝の本能が、もっとももっとと快楽を求めているような……いや、そんなことエンゼルマリンである自分にあるはずがない。

(だとしたらなんなの!? この切ない気持ちは、ああ……アソコが、クリトリスが……)



なおかつ媚薬を際限なく滲ませる魔性の肉壺となった愛理の膣穴に、剥き身の淫核と同等の性感帯である擬似ペニスを、これでもかと食い締められている最悪の状態だ。

「くひいいいっ、そ……そこっ！ 愛理っ、ダメっ！ 腰まわさないでっつ！ あううっ、アソコ、速すぎるからっつ！ もっとゆっくり……あああっ、くうっ！」

「あははっ、優奈のオチンポすっごい敏感だわ。それはねえ、宿主の性欲に比例して大きく、感じやすくなるのよ。我慢しないで優奈。どんなに正義を貫こうとしても、私も……そしてあなたも、ただの露出狂の変態ヒロインだったのよ。ほら、みんなを見て」

「そ、そんなこと……私たちはエンゼルヴィーナ……あ、あああっつ！」

愛理の目配せに合わせ、周囲を見て絶句してしまった。

生徒たち全員が、頬を赤らめ恥ずかしそうにしているか、恐ろしく冷たい軽蔑の視線をこちらに向けている。

「いくら媚薬を打たれたからって……ねえ」

「怪物と戦ってマンコ濡らすし、二人揃ってレズってるんじゃないか」

「へ、変態よっ。しかも裏切り者っ！ どうせ裏でラーマとつるんで、自分たちの浅ましい性欲を満たしてたんでしょう？ 汚らわしいわっ、そんなのでよく学園のアイドルとか、世界を守る正義のヒロインとか言っていたものねっ！」

「あ……ああ、そんな……私、私たちは本当にみんなの平和を。ラーマを倒そうって……あひいいいんっ！」



学園の生徒たちの胸に輝くドリムシードが、薄汚れて黒くなっていくのがわかる。

違う。これはダイアナの非情な策略で、自分は……愛理だってまだ本当に屈したわけじゃない！　そう強く弁解したかったが、身体を迸り続ける肉の快楽に妨害される。

「私たちは好きでこんなエッチなコスチュームを着て、ラーマと戦って、みんなの好色な視線を釘付けにしたかったの。ダイアナ様に調教されてるときにね、はつきりとそう感じたわ。負けちゃいけないって思っても、身体はずうつと快感を求めてた」

「違う、違う違うよ愛理っ！　みんなもっ！　私はエンゼルスイートだよっ！　愛理はエンゼルマリント！　私たちは夢と希望の……あんなんつつっ！」

必死に説得しようと涙ぐんだ声を出したが、愛理がわずかに腰を動かすだけで、ほんのそれだけで、擬似ペニスからすさまじいまでの快楽が迸り、大事な思いが紡げなくなる。

（オ、オチンチンが気持ちよすぎるよおっ！　ダメ、耐えないとお。愛理が、みんなが！）  
唇をフルフルと震わせ、切なげに眉をひそめる。愛理を元に戻し、学園のみんなの夢と希望を守るには、自分が決して快楽に屈しないことしかない。

しかし、媚薬淫汁を噴出しながら、肉棒を痛いくらいに締め付けている愛理の肉壺の気持ちよさは、健気な心を卑猥に弄んでいく。

「ほおら、エンゼルヴィーナスのド変態ロデオ、みんなにも見てもらいましょよ！」

愛理の両手が、ギョツと胸を揉み込んでくる。とつくの昔に勃起しきった乳首がジンジンと熱くなり、たっぷりと詰まった牝の肉脂肪が快感の微熱に悦んでユサユサと揺れる。

言葉通り馬に跨った格好の愛理の腰が、下から見るとクネクネと艶すぎる動きを見せて、魔性の勃起ペニスを狂わせる。

グチュツツグチュツツ！ ジュンジュンツツ！！

「あうっ、くひっ……んっつ、ああああっ！」

まるで股間から生えた肉茎が、一本の熱い鉄の棒になったみたいだった。いやでいやでたまらないけれど、今ならどうして男たちが女の穴を求めるのがわかってしまう。

愛理の細くて長い指で採まれ続ける胸も、肉棒と同じくらしいの熱量を、脂肪の内側から発散させている。

半ばポロポロのスーツに、噴き出した濃厚な汗が染み込んで、ベットリと女体に張り付いてくる。スーツと一体化したような扇情的なボディラインに、愛理と自身の放つ熱気が触れて、さらに媚肉がビチビチと張り詰めていく。

（き、気持ちいいっ！ 愛理のアソコでオチンチンググチュグチュされるの、癖になるっ！）  
小動物みたいにかわいらしい美貌は、快楽と正義との間で苦悩に揺れる、とてもいやらしい表情を作り上げている。

ウネウネと蠢く愛理の肉ヒダの一枚一枚が気持ちよくて、ひっきりなしにペニスに塗りとくられる媚薬愛液は、一瞬前の快感をさらに上回る麻薬みたいな悦楽を、休むことなく与え続けてくる。

「あ、愛理……動きがいやらしすぎだからあ、ああ……も、もうやめて……愛理見てるだ

「で、あああああつ！ オチンチン大きくなる、感じ、させられちゃうっ！」  
「下から覗く青いパートナーのグラマラスな肉体は、ただ見つめているだけで、おかしいくらいに劣情を催させてくる。」

肉感たっぷりの若い肢体が、エッチなブルーの変身コスチュームを着て、腰の上で淫らに踊り狂うのだ。

手を伸ばせば届く位置で豊かな巨乳がブルンブルンと揺れ動き、長い髪が振り乱される。パンパンと打ち付けてくるお尻の量感と柔らかさはすさまじく、それが前後左右に円を描き、M字に開かれたムッチリとした太腿は、噴出した汗でネットリとてかっている。

「はあはあ、私もすごく感じてるわあ。優奈のチンポお、私の膣内をゴンゴン抉ってくるのぉ。元氣すぎて、エッチなチンポねっ！」

「あつ、ひうんっつ！ んあああつ！」

我慢しようとしても、徐々にそして確実に、身体と心が快感に染まっていくのがわかる。愛理の顔を見ると、あんなに凜々しかった表情が、今では情けなく舌を出し、涎を垂らし、焦点さえもうっすらとぼやけている。

もう快感に浸ることしか考えていないのではないかとさえ思えるほど、艶やかでエロティックな表情へと変貌している。

「す、すごい乱れ方……あ、あんな人が生徒会長だったなんて」

「神園もだぜ。いやいや言ってるくせに、顔はしっかり感じてやがる。つたくとんだスケ

ペアイドルだぜ」

自分たちを見限り始めた生徒たちの誹謗中傷が心に刺さる。なにより、正体をばらされている状況で、みんなにこんな浅ましすぎるエンゼルヴィーナスの痴態を、見られているのが、たまらなく恥ずかしい。

「あはっ、生徒会長命令よ。みんな近くで見え。マリんとスイートのドスケベなケツの穴♪ それにおっぱいだって、オマンコだって好きだけ見てもいいのよ」

「なっ、愛理っ!? やめて、言わないで……ああっ、みんな見ないでええっつっ!」

愛理の一声で、周囲の侮蔑と嘲笑が、性的情欲を含んだものへと変わる。二人の美人学園アイドル、そして魅惑の変身ヒロインのあられもない痴態に、若い牡欲が反応する。

「ほんとすげえ。マリンのクソ穴、チンポ欲しがって開いたり閉じたり、マジでエロいわ」

「スイートの太腿もいいよなあ。さすが神園だぜ。引き締まったいやらしい脚だな」

「うへ、スイートってガチでパイパンじゃん? やっぱあの映像って本物だったんだぜ。ほんとシヨックだわ……はははっつ、ピッチヒロイン確定だなっ!」

二人を囲うようににじり寄ってきた男子生徒たちが、騎乗位で結合した二人の美天使を好色な瞳でまじまじと観察し続ける。

(わ、私見られて興奮してるっつ!! みんなの視線が……たまらないよおっ!)

エンゼルヴィーナスとして、いけないことをしているという背徳感が、見知った生徒たちに見られることで開花していく。

あからさまな下卑た視線を感じると、身体が熱くなる。自分はみんなの言う通りの牝豚なのだと思うと、恥ずかしさと同時に、体験したことのない気持ちよさが湧いてくる。

「あ、あああ……だ……めえ。だめっ、ダメっつ！　ダメええええっつ!!」

「あはっ、優奈のチンポ感じてる。みんなに見られて、馬鹿にされて気持ちよくなってるわ。エンゼルスイートはドMスイート。私も興奮してきちゃった。さあ、一緒にイキましよう優奈。みんなに……そう世界中のエンゼルヴィーナスファンに、二人は牝豚変態マゾですって、宣言しましょう!」

愛理の言葉が嘘だと思いたかったが、今まで以上にきつさを増した膣の締め付けに、これが現実なのだと思います。

「さあ、優奈。私を犯してえ。学園のみんなも動画配信よろしくねえ?」

絶望感に沈む優奈、そして快楽に堕ちた愛理は、性欲の虜になった男子数人に抱えられ、被虐のまんぐり返しの姿勢をとらされていた。

しかも今度は優奈が上で、なんと愛理が犯される側だ。さらにこの卑猥すぎる映像は、自分たちを見限った学園の生徒たちによって、全世界中にリアルタイム中継されている。

「あ、ああ……いやいや……こんなの……こんなのはいやあああっ!」

両肩をしっかりと男子たちに押さえられる卑虐の衆人環視。快楽に震える身体では、彼らを振り払うこともできない。

ヌッポリと愛理の肉腔にハマりきった擬似男根を……自ら腰を動かすのだけは阻止しよ

うと必死の想いで、荒れ狂う牡欲を耐え凌ぐ。

「世界中のファンたちが待つてるぜ、エンゼルスイート、それにマリリン。てめえらの本性を知って、ヌキまくりたいっていうクズやろうどもがなっ！」

「あなたたちが夢と希望をくれたと思つてたのに！ あはっ、世界中に恥を晒せばいいわ。このくそビッチども！」

「これは処刑なんだよ。ラーマを倒すフリして、俺たちを騙したてめえら牝豚のなあ！」  
聞くに堪えない汚い言葉が刺さってくる。そのすべてが悲しみを、そしてそれ以上に強い背徳の快楽を感じさせる。

（ああ、世界中に見られて。愛理、エンゼルヴィーナスは……本物の牝奴隷に……つ）  
生徒たちが向けてくる携帯端末や録画機器のカメラに映る、自分を見る。

発情しきった状態で、顔は赤らみ、悔しそうな表情を浮かべてはいるが、異形のペニスなのに愛理の改造腔の締め付けで感じまくっていることは、一目でわかる。

溶けるように破れたスーツから覗く胸は、ピンツと張り詰めて、乳首も赤く勃起しきつている。色っぽい尻やガニ股に開いた両脚も、ブルブルと官能の痺れに震えまくつており、これで変態でないとは、もう言えない。

「はああ、優奈。ダイアナ様が私たち専用の娼館を作るって仰つてたの。ああ、楽しみね。どんな下衆な男たちに、犯されるのかしら？」

いっそ愛理のように狂つてしまえば……そうじゃない。愛理を助ける。ラーマから平

和を守る。それがエンゼルヴィーナス。それこそが自分の使命……っ。

「ほらっ、腰振れよっ！ 牝豚ヴィーナスっ!!」

「あひっつ!! あ、あああ……おおうッッ!!」

ポンッと軽く腰を押されると、膣と肉棒がズブジュルウツ！ と擦れあい、背筋を圧倒的な快感が迸った。

一番奥までヌププツと入り込んだ陰茎が、正義の心を通り越した、快楽を望む牡欲によって引きもどされ、間髪いれずにもう一度奥まで突きこまれる。そしてそれを何度も何度も……もう腰の動きが止まらない。

「あああっ、あひっ！ き、気持ちイイっつ！ おおっ、オチンチン、愛理のアソコにおおっ！ 気持ち、イイよおっ!!」

もう我慢できなかった。悔しいのに、世界中に中継されているのに、この絶対の快楽をもたらず肉と肉の触れ合いを止めることはできなかった。

「あはああっつ、私もよお優奈っ！ ほらあ、みんな見てるわよおっ。エッチなまんぐり返しでズコバコしてるあなたと私いっ。もつと突いてっ、奥まで突いてっ！ 突いて突きまくって、私をもつと辱めてえええっつ!!」

快楽に狂い頬を赤らめて笑う愛理の顔を見るのが辛い。どうして大切な親友をこんな顔にさせなければならぬのかと思う。

けれどダメだ。止まらない。媚薬と魔性の背徳感が生み出すこの変態エッチを、みんな

にもっと見てほしいと、心のどこかで思ってしまった。

「うわ、ほんと最悪……。最後まで信じてたけどこれじゃ、もう信頼しようがないわ」

「信じてた人たちに申し訳ないと思わないのかしら？ ああ、豚に人の心はわからないか」

「私なら世界中に中継されてのエッチなんて、恥ずかしくて死んじゃうかもなのに……。エンゼルヴィーナスって、DMじゃないとなれないのかしら？」

みんなの容赦ない蔑みの声に、自分はもう牝豚としか見られていないのだと、思い知らされる。

「だめなのに、気持ちイイのお。みんなに見られてバカにされて……。エンゼルスイートはあ。すつごくすつごく気持ちイイよおっ!!」

生徒たちの辛らつな声を焚き木にするように、内から湧き出る淫欲の炎がどんどん勢いを増していく。

「優奈あ、私イクっつ！ イクわよっ！ もうイクッツ！」

「ああっ、私も変っつっ！ オチンチン出るっつっ！ いやなのに、出るうううっつ!!」

愛理の膣道が、最大の力でギチチッ！ と肉棒を締め付けてくる。触手ペニスが爆発的な快感に支配され、もう我慢などできるはずがなかった。

ドピュオオオオオオッツッ！ ドピュドピュッツ!! ブシヤアアッツ!!

「ああっ、イクッツツッ！」

「おほおほおうっ、イグウウウウウッツ!!」





## 第七章 スイート、禁断の快樂に墜つ

全世界に中継された、卑猥極まりない淫乱レズ絶頂からすでに数週間が経とうとしていた。

ラーマに唯一対抗できたエンゼルヴィーナスの信頼失墜によつて、世界の秩序は徐々に墮落していった。

ダイアナ率いる怪物たちの悪逆行為は、善良な人々から希望を奪い、ラーマに取り入ろうとする悪党たちは、残虐で非道な手口を横行させた。

「あ……あひ……おおお、ひつ、ぎいろう」

優奈にとつて、久しぶりに与えられた休息だったが、薬によつて常に発情しつぱなしで、息をするだけで軽く絶頂してしまう現状では、自分の惨めさを改めて確認させられるだけの時間だった。

優奈の姿はエンゼルスイートに変身した状態で、秩序を失った聖ウエネス学園の男子トイレの小便器に拘束されていた。

怪物を一撃で倒すほどの奇跡を体現していた両腕は、力なく頭の上で生まれ、男子用便座に繋がっている配水管に、赤黒い触手縄でくくりつけられている。

快樂に墮ちた身体が、両脚がガニ股に開かれた牝豚ポーズをすっかり覚えてしまつてお

り、ひっきりなしの発情の中、かろうじて寝ている間でさえ、卑猥な肉便器奴隷のポーズを無意識にとっている。

数週間、ロクに掃除もされていない便座には、情欲のまま吐き出された、干からびたものと、まだ熱を持ったままの精液が大量にぶちまけられている。

(わ、私……負けちゃ……あひい……おおっっ！)

エンゼルヴィーナスとして悪と戦い、そして無様に敗れた自分の今の立場を嘆く前に、以前よりさらに艶っぽくムッチリとした牝豚の身体が、たまらない快感を流してくる。

覆うものさえ剥ぎ取られた白い肌に触れた空気は冷たいが、逆に、さまざまな情欲汁の熱気を鮮明にする。

スーツのお腹の部分は無残に破かれ、元から無毛であつたいやらしい蜜壺のすぐ上には、皮肉たつぷりに天使の羽根の絵がダイアナの魔法によって彫りこまれ、下向きの矢印の横に、敗北ヒロインの肉便器穴と屈辱的な言葉が書き連ねてあつた。

「あひ……もつとちようらい、精液いい、おおっ……マリンの肉便器にチンポいっばい突っ込んでええっ！ あはああっっ！」

「つたく、どんだけ好きものなんだよ、この豚はっ！ おらおら、エンゼルマリン様の大好きな学園生徒のクソチンポだぜ！ まあ、元だがな。はっはっっ！」

ドチユツツ！ ズンズンツツ！！

「ほおおんっっ！ いい、いいですうっ！ 男子の醜悪チンポおっ！ イクイクウツ

ッ！ エンゼルマリンの牝マンコ、イグウウウツツ！！

「あ……あ、り……」

愛理は、優奈と同じくエンゼルヴィーナスのポロポロのコスチュームのまま、すぐ横の便器で同じように拘束され、もう何回目かもわからない、派手な潮噴き絶頂を晒す。

敗北した優奈たちは、文字通り、相手の情欲を吐き出されるだけの肉便器の生活を強要されていた。

「へへ、マリンは相変わらずだな。スイートのやつも、まだ絶頂の余韻に浸ってやがるぜ」  
「しょうがねえだろ、俺たちを見捨てて、レズりながら、イキまくる牝豚なんだからよお」  
汚れた男子トイレに、若い少年たちの下品な声が響き渡る。

学園の生徒たちは、すぐに人間の姿を捨て去り、黒とダークグレーのツートンカラーをした怪物……ラーマの戦闘員へと姿形を変える。

「み、みんな……あつ」

人間ですらなくなった級友たちを見て、心が悲しさと悔しさに痛んだ。

みんなの前でフタナリ絶頂に達した日、学園の生徒たちは、ダイアナによって全員がラーマの戦闘員へと改造させられた。

肉体だけでなく心まで調教改造された彼らに理性の枷はなく、人間のときに隠していた己の歪んだ欲望、そして彼らの「ご主人様」である、ダイアナに絶対服従を誓っている。

「おら、もう休憩は終わりだぜ。さっさと役目を果たせよ、この肉便器がっつ！」

男の一人が目の前に立つと、醜惡極まりない肉棒を股間からそそり立たせてきた。

過去犯された人間のモノとは比べ物にならない巨根ペニス、まるで趣味の悪いデイルドのように、雁首から根元にいたるまでブツブツとしたイボが無数に生え出ており、男根自体も女を貫くドリルのようにきつい螺旋状をしている。

「や、やめてよ……そんなオチンチン……こないで、お願いだよおっ！」

雨に濡れて震える迷い猫のように、級友であった戦闘員に懇願してしまう。

この数週間、人間を裏切り、ラーマに組した下衆な中年たちに性欲処理扱いされ続けてきた。けれど、仲のよかった元クラスメイトたちに犯され、まわされるのでは、心のダメージが全く違う。

「へへ、あのおっさんたちのより、俺たちのチンポの方がよっぽど気持ちいいぜ」

「神園……いやエンゼルスイート。へへ、人間だったときも思ってたけど、お前イイケツしてるよなあ？」

ズリズリいっつ。

「あっ、ふひいっつ！ お、尻にいいっつ！」

器用に優奈の下に入り込んだもう一人の男子が、こちらもいきりたつた戦闘員ペニスをすぼまった菊門の入り口へとグリグリ円を描くように擦りつけてくる。

「ほうっ、ああっっ！ やめてえ……オチンチン、そんなにしないでえっ！」

男子トイレ中に充満している牡の臭いだけで、気がおかしくなるくらい感じているのに、

直接感じる部位にチンポを押し当てられれば、肉改造された牝の本能に制止が利かなくなってしまう。

「はううつ、くひつ……ああつつ、ああんんつつ」

理性でいくら拒んでも、息を吸うのと同じくらい自然に腰が卑猥に動いてしまう。

膣と尻に近づけられた肉竿に、セックスを期待してブチョッ！と大量に溢れ出した愛蜜と腸液に濡れた二穴を交互に擦り合わせ、男のペニスに媚を売る。

はつらつとしたかわいい声も、驚くくらい艶めいている。

「ぎゃははつつ、自分で腰振って求めてやがる。そんなにクラスメイトのチンポが欲しいのかよ!？」

まるで娼婦のごとくエロティックなアプローチをするまでに堕ちたヒロインに、男たちの容赦ない罵声が飛んでくる。

「ああっ、もう我慢できねえっ。スイート、てめえのグチヨグチヨマンコに、俺の改造ペニスをぶちこんでやる！」

「こっちはケツだあ。ぐへへ、エンゼルスイートのケツマンコ……どんな味がするのか楽しみだぜえ」

膨れ上がった龟头と雁首が、示し合わせたタイミングで、ズチュンッ！ズニルッッ！と二穴の肉唇を力任せに押し開く。

螺旋肉棒が熟した肉ヒダを強制的に目覚めさせると、ギユッと引き締まった女壁から、

無数に突起したイボイボのゴツゴツした感触が、密集した快感中枢を激しく刺激する。

（は、入ってくるううっ……が、我慢しないと……っ、クラスメイトのオチンチンでイクなんて、そんな、こと……っっ）

感じるのとは仕方ない。けれど必死の想いでイクのだけは堪えようとした。みんなを守るためにエンゼルヴィーナスとして戦ってきたのに、いくら戦闘員に改造されたといつても、近しい級友のペニスでイクことなど決してしてはならない。

（くる、くるくるっっ！ オチンチンがああっ……くるうっ!!）

ズジュンンツツツ!! ジュボンンンツツツ!!

これまで何百本もの牡ペニスを呑み込まされてきた二穴は、ドリル状の改造肉棒を難なく奥まで引き入れる。

男子小便器に拘束された身体が、生ペニスの二穴挿入のゾクリとするような壮絶な快感に、ビビクツツ！ と震え上がる。

気持ちよすぎるっ！ でもダメだ。いつてはいけない。絶対にいつては……。

「いやあっ。入ってこないでっ！ これ以上くると……私、私いいっっ!!」

「なあに、真面目ぶってるんだよ？ そおら、一気に奥までぶちこむぜっ」

「こっちもだっ。おらあああああっっ!!」

「う、うそ!? やめ、やめてえっっ!!」

抗議もむなしく、二人の腰が杭でも打つように、思いきり腰と尻に打ち込まれる。長さ

二十センチはゆうにあろうかというドリルペニスが、膣と腸をゴチュゴチュと奥まで挟む。桜色の媚肉が壁一枚を挟んだ二つの穴で、無数のイボと螺旋状の肉棒によって一斉に刺激される。

人とは違う凶悪な凸凹がついた二穴突きは、肉改造によって極上のオナホールと化した快楽器官を、ものの一撃によつてことごとく蹂躪し、灼熱の悦楽で支配する。

ゴットンツツ!! ギュルンツツ!!

挿入から散々肉ヒダを弄つてきた肉棒たちが、子宮壁と直腸奥にその先端をぶち当てる。身体中の快楽神経を剥き出しにされ、直接擦り上げられたかのような甘美感が、全身を突き抜ける。

「くるつつ、くるうつつ! イッグウウウウツツ!!」

便器に後頭部を打ち当てるのではないかと思うくらいに、グンツと大きく背筋を反らし、一瞬にして白目を剥いたアクメ顔を晒す。

赤く勃起していた乳首が、さらにきつく尖って、肉体改造の結果である、母乳を先端からドビュビュツツ! とぶちまけ、級友に愉悅の射乳絶頂まで披露してしまう。

「いったつ! イキやがったつ。一回ぶちこまれただけで、変態アクメ晒しやがったぜ!」

「うおおおつ、すげえ締め付けっつ! そこらへんのビッチのケツなんてめじやねえぜ。ははっ、ここまでスケベに改造されちゃ、もう正義のヒロインには戻れねえなあつ!」

男戦闘員たちは笑いながら、本格的に腰を動かしてくる。





北のトイの更紗

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル！

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！  
かなり過激なライトノベル！

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

11年目も激しさそのまま、お楽しみもそのままで!

EDREAMMAG

さらさら  
おもしろ  
かわさか  
ぷりんと  
空想くらぶ  
おもしろ  
おもしろ

偶数月  
17日発売

Vol.61  
2011年12月

**2次元ドリームマガジン**

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!

大興奮! 王道と最新Hの両方!!

魔法、催眠、性転換...  
不思議Hコミック誌!

特典  
から  
Hisasi

奇数月  
12日発売

**コミックアンリアル**

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!

Prism  
コミックプリズム

18歳以上  
420円

あついでドキ  
いはい聞かせて

2・6・10月  
下旬発売

**コミックプリズム**

KTCといえば闘うヒロインアンソ!

Cover Illustration 和馬村政

メガミクライシス  
Vol.1

自分勝せぬ  
雷のライ  
和馬村政  
対魔皇  
ハルブルギスの  
chaco

目覚めると従弟  
美少女無二に交  
ハレムキヤ  
アンソ!

奇数月  
中旬発売

**メガミクライシス**

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。

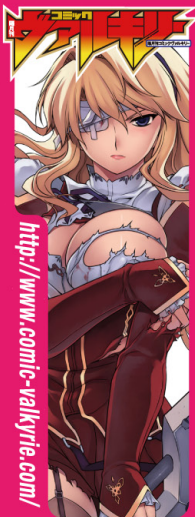




# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>



<http://www.cran-berry.com/>



<http://www.mille-feuille.jp/>



<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!